北播三大祭の一つ 佐保の秋の大祭に集う

社の地は、明治時代に加東郡役所（現在の明治館）が置かれ、現在では北播磨県民局などの行政機関が置かれる北播磨の中心として発展してきました。

過去をたどると、このまちは、一つの神社を中心に人々が集まり、村を形づくったという歴史があります。

今でもそこに住む人々は、年に一度、絢爛豪華な屋台とともに大社に集い、五穀豊穣と地域の発展を感謝します。

佐保神社の由緒

社の地名の由来

『佐保社由来記』『佐保社略由来』『社記』『社伝』などによると、佐保神社の歴史は古く、もとは加西市鎌倉峯にあり、かつては坂合神社と呼ばれ、十一代垂仁天皇二十三年の創建と伝えられています。

四十四代元正天皇養老六（七二二）年に現在の地へ遷座されたといわれています。（新修加東郡史より）

佐保神社は、北播磨第一の大社といわれ、「社」の地名は、佐保神社の門前町として発展してきたことに由来します。

最盛期の氏子は百余村

佐保神社が最も隆盛を極めた鎌倉時代には、朝廷や幕府の崇敬を集め、近郷の一般の民衆も厚く信仰したため、加東郡（現在の加東市と小野市）内外に百余村の氏子があったと伝えられています。

また、八町（約八百七十メートル）四方に内の鳥居が、一里（約四キロメートル）四方に外の鳥居があったといわれています。現在も内の鳥居のうちの一つ（西の鳥居）が残っており、鳥居地区の名前の由来といわれています。

江戸期に再興

室町時代には争乱などにより一時的に勢いを失いますが、江戸時代には、姫路藩より社領十石を寄進されるなどして再興しました。

江戸期の佐保神社は、近郷の人々の生活の中心であり、門前には京街道が通り、宿屋などもあって大いに栄えたそうです。

佐保神社の持つ『格』

佐保神社の格を表す言葉に、「延喜式内社（単に式内社ともいう）」と「県社」があります。

延喜式内社とは、延長五（九二七）年に記された『延喜式』の神名帳に「官社」として記載された全国の神社を指します。これに記載がある神社は、朝廷に認められた神社を意味し、その歴史と規模をうかがうことができます。

一方、「県社」とは、明治時代の近代社格制度により定められた神社の格で、佐保神社は、官国幣社（国から捧げ物を受ける神社）に次ぐ格を持つ県社（県から捧げ物を受ける神社）の社格が近郷で唯一与えられました。今も「縣社佐保神社」の石碑が、参門脇に建っています。

社号の変遷

佐保神社の社号は、もとは「境之神（さかひのかみ）」であったものが、「坂合神（さかあひ）社」となり、その後に「佐加穂（さかほ）神社」と呼ばれ、さらに「佐保（さほ）神社」に改められたと伝えられています。